

労働リーダーシップ東日本コース◎40周年記念シンポジウム記念講演

「プロジェクトX

—ものづくりへの挑戦—

今日はIMF-JC労働リーダーシップ創設40周年の節目となる、皆様がたの大切な集いの場と呼んでいただき、心から感謝を申し上げます。同時に、この厳しい時代環境の中で、まさに最前線でリーダーとして日々戦っておられる皆様の前でお話しする場を与えていただき、大変光栄に感じています。本日ご出席の皆さんの出身の会社を見ると、私どもの番組でも取り上げさせていただいたところも数多くあるようで、今日は仲間の一人が話すものだと思って、気楽に話を聞いていただきたいと思います。

事に当たったときの日本人のすごさ、底力に感動し、毎回胸に迫るような思いでこの番組を続けてきました。合計196本の放送を出しましたが、毎週1500万人から2000万人が見て下さった番組であります。子供に見せたい番組の4年連続1位になり、世界30カ国で放送されました。今年ベトナムの映画館、そして中国全土のテレビで放送が始まります。そしてまた、中島みゆきの歌番組主題歌「地上の星」は、174週連続ヒットという、戦後日本最長のロングヒットを記録しました。しかし、この「プロジェクトX」

は決して順調に立ち上げた番組ではなく、われわれなりにもがき、苦しみながら続けた番組なのであります。

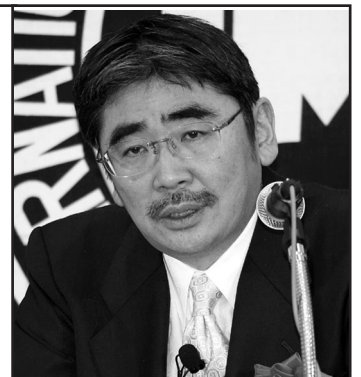
プロジェクトXにか けた思い

本日はこの「プロジェクトX」という番組をいかなる思いで始めたのか、そして、その中で出会った戦後日本人の素顔、殊に、ものづくりに生きたリーダーたちの生きざまについてお話をさせていたきたいと思います。

最初に、200本近い「プロジェクトX」を作る中で、確信に近

い思いがあったことがあります。それは、われわれが生きている日本という国のことです。この日本という国は、決して中央に現れた政治的なスターや、国家的リーダーが率いてきた国ではないという

NHKエグゼクティブプロデューサー
今井 彰
いまい・あきら
1980年NHK入局。NHK教養番組ディレクター、チーフプロデューサーを経て、現在、エグゼクティブプロデューサー。91年度・文化庁芸術作品賞受賞・NHKスペシャル「タイス少佐の証言から湾岸戦争45日間の記録」、02年度・2002年ザ・ヒットメーカー賞受賞。その他受賞多数。「プロジェクトX」挑戦者たち」は平成13年度菊池寛賞、第9回橋田壽賀子賞、放送文化基金グループ部門賞、ATP特別書 受賞。



ことです。

昭和20年8月15日に終戦になりましたが、日本はそれこそ科学も技術も文化も、すべてが根絶やしになるような状況になり、全国に荒涼たる廢墟の光景が広がっていました。戦後日本のその姿は、世界の中で例を見ない惨憺たるものでありました。例えば、東京では230万戸の家屋が焼失し、600万人が焼け出されました。つまり、この東京に生きる3分の2の人間が、その日その日の雨露をどうやってしのぐかという惨状の中にあつたわけです。

その、まさにゼロの地点から、今の日本を築いてきたのは誰であつたのか。それは全国各地で生きた人々であつたのです。そして、そこに生まれた中小企業や、そこで生きたサラリーマンたちなのです。疲弊しきつた自分たちのふるさとをよみがえらせよう、ボロボロに傷つき果てた自分たちの会社を踏ん張って再建しよう、そう願いながら奮闘を続けた全国数千、数万のプロジェクトの総意のうえ

に、今われわれが生きている日本という国はあるのだと思います。そして、その先頭に立って闘ってきたのは、「ものづくりにかけた人々」でありました。

スタートは世紀末の バブル崩壊と自信喪失の中

しかしながら、10数年前、日本に嫌な時代がやってきました。バブルが崩壊してからの10数年、日本人は世界から随分ひどいことを言われ続けてきました。いわく、技術力が低い、営業力が弱い、国際競争力が20数番目だ。おまけに大胆さに欠ける臆病な民だ。そのようなことを、内なるマスコミからも、外国からも言われ続けてきました。

そうした中で、今を懸命に生きている人々は、自分の日々の営み、努力を否定されたような苦い思いを味わいました。開発の現場では資金が削られ、開発者たちはその肩を落としてました。営業現場では物が売れず、営業マンたちは重い

足を引きずっていました。そして、戦後から今日までこの国を支えてきたベテランたちにとっては、自分たちの人生まで汚されたような、つらい時間が流れたのです。プロジェクトXは、そうした時代状況の、世紀末に始まるうとした番組であつたのです。

番組に込めた思いとしては、戦後から今日に至るまで、各時代を



プロジェクトXタイトル

生きた人々、殊に、ものづくりに生きた人々が、いかなる思いを宿して、いかなることと向き合い戦ってきたのか、そのことがきちんと証明できるような番組、そして、できるならば、そうした人々の仕事に、一筋でもいいから光が当たるような番組を作りたいと思ひ、NHKの方にこの「プロジェクトX」の企画を提案したのです。

しかしながら、現実には甘くはありませんでした。NHKにこのXの企画を出したときに返ってきた答えは、「二体誰が見るのか」という声でした。ご存じのように、テレビには視聴率という大変残忍な数字があります。テレビに生きる人間はみんなその数字によって一喜一憂するわけです。そのテレビの視聴率というのは、恐ろしいことに、1%の視聴率を取るのに、実に120万人の人が見なければなりません。その視聴率をどうやって取れるかというと、端的に言えば、有名人・著名人がたくさん出ることに尽きるわけです。有名なタレントや知識人が出てくれば、

その人たちを知っている数%という視聴率が合算されて、ある程度よって、テレビ局はそうしたシーンになると、有名・著名人のスケジュールを押さえることに走り回るわけです。

想像以上の手間を要したプロジェクトX

そうした中で、本当に無理無茶をして通したが、このプロジェクトXの提案です。しかし、残念ながら、提案が通った段階で、私に与えられた部下というのは6名だけでした。つまり、私を入れて7人でこの番組をスタートせざるをえなかったのです。おそらく通常のこの規模の番組を作る要員としては、4分の1、あるいは5分の1ぐらいの人間しか与えられなかったわけですね。そして、その7人のメンバーでこの番組の取材を始めて、すぐに分かったことがあります。それは何かというと、ものすごい手間がかかる番組だったということです。1本あたりの「プロジェクトX」を作るのに、大

体短いもので3か月半、長いものでは半年かかりました。

なぜそのような期間がかかったのかというと、東京タワーの例で説明させていただくと、「プロジェクトX」で東京タワーを取り上げようとしたときに、まず、なぜ昭和30年初頭に関東全域をカバーする総合電波塔が必要だったのかという社会的状況から入ります。次に、一体いくつの会社が東京タワー建設に参加して、その会社個々の力量はいかがなものであったか、そうしたことを調べます。そして、あの時代に東京タワーの鉄材を含めた物資をどうやって集めたのか、を調べます。そして、あの東京タワーの設計図面を引いたのは、内藤多仲（タチュウ）という早稲田大学の先生です。別名『塔博士』というあだ名があり、東京タワー以外にも、大阪の通天閣や、名古屋タワーの設計図面も引かれた方です。なぜ彼が、廃墟となった日本のいろいろな都市に、皆が希望の塔として見上げることができるとか、その心を調べるわけですか、

た、それ以上に、あの工事に関わった一人ひとりの技術者や職人たちが、どのような思いでポルトを締め、鉄骨を組み上げていったのか、いかなる困難と立ち向かったのか、そうしたことを調査しようとしたわけです。

そうすると、当然のことですが、定年退職して全国各地に散った方が数多くいました。亡くなった方もいました。有名人の記録ではなく、市井を生きた名もなき英雄たちが、どのような人生を生き、どのような仕事をしたのか、その軌跡を求めて、私を入れて7人のメンバーで全国各地を、取材して歩くという番組にならざるをえなかったのです。そうして、7人で全国に散って、その方々が住んでいる土地を訪ね、その人を探し、その人の話を聞き、資料を集め、夜、東京のNHKに戻ってくるという生活が始まったわけです。そして、皆でああでもない、こうでもないというような打ち合わせをして、毎日午前2時から3時ごろには家に帰っていました。ところが、だんだんその時間が朝の4

時、5時になり、6時になり、しまいに家に帰ることができなくなり、皆会社のソファで仮眠を取り、寝泊りをしてはまた取材先に出掛けていくという、まさに自転車操業以下の日々が始まったわけでありました。

主題歌「地上の星」の誕生

私を入れて7人のメンバーで本当にやることのできるのか、そう思ったときに、この番組とこの番組に登場される方々を守ってくれ強い味方がほしいと、切に願うようになりました。それは誰かというとき、中島みゆきです。NHKに出した中島みゆきを起用したいという要望書に私はこう書きました。「1970年代、80年代、90年代に、必ずナンバーワンのヒットを記録したところのある歌手で、多くの人がその歌声を知っているのを、ぜひ中島みゆきさんに曲作りを依頼したい」と書きました。中島みゆきはデビューして30年になるが、いつも彼女の歌は『弱者視点』なのです。弱者視点というの



記念講演する今井氏（明治学院大学）

◎第40回労働リーダーシップ東日本コース報告

は、消費者と同じ目線、一般の人と同じ目線だということです。街角を生きる人々の背中であったり、好きな男を待ちわびる女性の胸の内であったり、普通の人と変わることのない目線で歌い続けることができた、唯一の歌手であると思っています。

東京・青山で彼女のコンサートがあつて、久しぶりに楽屋へお邪魔したときのことです。もう本番が始まる1時間半前ぐらいで、会場は人で鈴なりにいっぱいになっていました。楽屋で積もる話をしようと思つたら、中島みゆきさんからこう怒られたのです。「今井さん、ご存じでした？私はデビューして30年になるけれど、私のファンというのはずっと20代、30代を中心にした若い女性たちでした。今日の会場を見ていただけませんか。くたびれた中年男ばかりじゃないですか」と言うのです。でも、その一方で、彼女は「自分がメッセージを込めて、その人たちの顔を思い浮かべて、働く姿を思つて書いた歌を、自分たちの歌だ

というように受け止めてもらつて、3年半にも及ぶ信じることでできないようなヒット曲にしてもらつた。これは歌手冥利に尽きることなのです」とも言つてくれました。

**中島みゆき、
黒部ダムに立つ**

中島みゆきという人は、デビューして30年間、NHKの紅白歌合戦の担当者から毎年のように「紅白に出てくれ、出てくれ」と言われ続けましたが、ずっと断り続けてきました。テレビには、基本的には出ない方なのです。その人がただ一度、2002年暮れの紅白歌合戦に黒部からの生中継で出てくれました。そして、彼女がもう紅白の舞台に立つことは生涯ないと思われまふ。なぜ中島みゆきは黒部から生中継で歌つたのか。

黒四ダムは、関西の電力供給のために作られたダムです。関西圏は昭和30年代に入つても、産業の命である電力の不足にあえぎ続けていました。電気が工場に届かない日が週に2日、一般家庭には週

ものづくりの挑戦者達の話は参加者に感動を与えた（講演する今井氏）



に3日という状態で、夕方になると、魔の停電タイムというように

恐れられていました。その関西の地理地形を考えたときに、巨大な水力発電ダムが造れる場所というのはただ1カ所しかありませんでした。それがアルプス立山連峰3000メートル近い山々を越えた秘境、黒部です。しかしながら、黒部にはその時代、ある諺があります。それは、「黒部にケガはない」という言葉です。黒部で事故に遭えば、ケガなどでは済まない、

必ず命と直結する、そう言われた秘境であります。

しかし、多くの技術者や職人たちが、関西の地に電力を供給して、工場に活力を与え、人々の暮らしに火をともします。そう願って、あの黒四ダムの工事に参加をしていきました。そして、アルプス数千メートルを越えて数千トン近い建設資材を運び、映画「黒部の太陽」の舞台にもなりましたが、大町トンネルではまさに未曾有の出水と格闘し、あの厳冬の地で7年間に

わたって耐え抜き、まさに日本建設技術界の魂ともいえるような構造物をあの地に造り上げたわけです。黒部に行った方は分かると思います。あの山々を抜けて黒四ダムの前に立ったとき、このような場所に何でこのようなすごい物ができるのだと、日本人の底力に身が震えるような思いになるに違いありません。しかしながら、同時に恐れていたように、171名もの尊いものづくりの命が黒部の地で失われました。

「私も一番苦しい場所で歌わせて欲しいのです」

中島みゆきはこう言いました。

「今井さん、『プロジェクトX』という番組を見るまで、テレビを見ていていつも思っていたことがありました。青函トンネルもそう、黒部ダムもそう、いつもテレビに出てくるのは、テープカットをする建設大臣や運輸大臣じゃないですか。わたしは初めてこの番組で、地の底で汗にまみれて、泥にまみれて生きている日本人の顔を見せ

てもらいました。毎週毎週、必死に懸命に生きてきた日本人の顔を見せてもらい、その話を聞かせてもらっています。だから、私も一番苦しい場所で歌わせてほしいのです」というのが中島さんの紅白出演に当たったの申し出だったわけです。

2002年の暮れ、彼女が歌おうとした場所は、黒四ダムに続く資材トンネルの中でした。かつて、いろいろな建設資材を乗せたトラックが駆け抜けた作業用トンネルです。岩肌がゴツゴツしており、音響も何もあつたものではありません。大みそか、23時を過ぎたときのトンネルの気温はマイナス2度になっていました。声が震えてしまうので、マイナス2度の場所で歌える歌手などいません。しかし、中島みゆきは歌うと言い張って、本番が始まった瞬間に、肩に羽織っていたショールを脱ぎ捨てて、あの厳冬の黒部で、もろ肌脱いで、震える声で歌い抜いたのであります。あれがまさに中島みゆきという女の心意気、ものづくりの皆さんへ贈った「彼女の心」だ

と私は思っています。

第1回放送日 NHK 50年のタブーへ挑戦

いよいよ第1回目の放送日が近づいてきました。本当は分かっていたことですが、一番恐れていたことがクローズアップされてきました。それは、NHK 50年のタブー、すなわち、会社名と商品名の壁のことです。ほかのすべての壁は乗り越えてみせると思っていたのですが、この会社名と商品名の問題が大変なることは分かっていたました。

そのときに私はこう言いました。「日本には確かにいろいろな歴史があると思う。信長の歴史だって、家康の歴史だってあるかもしれない。しかし、少なくとも昭和20年8月15日、この国が科学も技術も文化も根絶やしになった終戦から今日まで、この国を築いてきたのは誰なのか。それは全国各地域に生まれた中小企業と、そこを生き残ったサラリーマンたちではなかった

のか。彼らが社会に貢献しよう、市民生活を豊かにしよう、産業に活力を与えよう、そう願いながら作り、そして社会に受け入れられた製品というものも、日本の技術史、文化史、科学史としても、きちんと位置づけてもいいような時代が来たのではないか」ということを申し上げました。「それは学校の授業ではほとんど教えてもらえないけれども、今の若い人たちが知らなければいけない、本当の日本人の戦後の歴史ではないか」ということを話したわけです。

『社会に受け入れられた製品』というの、わたしは意味があると思います。車の例で言うと、例えばマツダが作ったロータリーエンジンがあります。原爆によって十数万の人々が亡くなった広島で、まさに産業の復興工場となったマツダ。あのロータリーエンジンというの、ジェームズ・ワット以来、世界の技術者たちが2000年以上挑戦してできなかった技術です。レシプロエンジンに対して、円運動をするロータリーというの

は、ある意味とても難しい、繊細なエンジンであって、そのエンジンを、広島原爆の被災を受けた会社の人々が育てながら守り継いで、今に受け継いできました。それはまさに、日本の科学史、技術史、文化史の中で、位置づけてもいいことではないかと私は思います。

また、富士重工がつくった『スバル360』という小さな車があります。とても小さな車ですが、金持ちしか車に乗れなかった時代に、サラリーマンでも車に乗れるかもしれないという家族の夢をつなげてくれた車でもあります。そして、ホンダのCVCCもそうです。社会に受け入れられた物、製品というの、必ずそこに込められた人々の思いがあり、人々の幸せ、生活を豊かにしてきました。そうした商品であるわけです。そうした商品名を語ってはいけないのか。そのような問題と突き当たったわけです。

そしてもう一つ、会社名、社名というのには別の思いを持っている

ます。社名というのは、そこに生きるサラリーマンにとって命のように大事なものです。多くのサラリーマンは、その社名の中で大事なシーズンを過ごしていきます。その中で自分の教養を獲得し、顔をつくり、自分という人格をつくっていくわけです。そして、そこに所属するサラリーマンたちは、まず自分の社名を名乗ってから、自分の名刺を名乗ります。

この番組が始まるようになっていた20世紀末、日本の会社は今よりももっと痛んで、傷ついていました。おまえの会社は危ないのではないか、おまえの会社は、明日はどうか、おまえの会社は何か問題を抱えているのではないか、そのようなことを言われて続けていました。そうした不安の中でも、そこに生きるサラリーマンたちは、まず自分の社名を言ってから、自分の名前を名乗るわけです。そして、自分が人生の大事な時間を過ごすその場所を、誇りを持って語れる場所、胸を張って語れる場所にしたかと思っっているわけで

す。

そうした時代状況の中で始まる番組が、会社名を言うてはいけない、製品名を言うてはいけないということでは、そのような番組が世間で通用するはずがないと私は思っていました。ただ、それは一プロデューサーにすぎない私が決める話ではなくて、かといって、NHKの偉い人に決めてもらおうなどという気も全くありませんでした。すべてはこの番組を見てくださった視聴者の方々のご判断に委ねようと思ったわけです。

私たちにとっても運命の放送といえるプロジェクトX第1回の放送が2000年3月28日に行われ、放送終了後、視聴者からの電話がかかってきました。通常テレビの反響というのは、50本ぐらいの電話がかかると「すごい反響がありました」と報告するものなのですが、まだ名前も知られていない番組にもかかわらず、1週間で全国から5000本を超える電話がかかってきました。もちろん、その数はその年の、NHKのすべての番組の中で最も圧倒的な反響

があった番組となりました。電話をくださった方々、その多くがものづくりの人々でありました。業種は関係ないが、皆さんがその電話口で何と言ったのか。異口同音に、「自分の大切な夢をあきらめたくない」と皆が言っていました。なぜ皆がそう思ったのでしょうか。

日本ビクターでVHSを開発した責任者である高野さんが表舞台を去っていくときに、後輩の経営者たちに「権力やルールで社員に指示しても、本当に人が動いてくれるわけではない。権力によってではなく、感動によって人を動かすのが真の経営者ではないのか」との言葉を贈っています。この“感動”という言葉は吐いたのは、物書きでもマスコミでもない。非常に厳しい家電競争を率いた実務家が吐いた言葉であります。そしてこれは、高野さん以外にも、名リーダーといわれた方々がこの言葉をも大切にし、表舞台を去っていくとき必ずこの言葉を残していくわけです。それはなぜなのでしょうか。

魂の打ち震えるような感動のひと時を与えること、それがリーダー

プロジェクトというのは、このように順風満帆にできるものではありません。会社の中で一つのことを考えついても、社内の中でも多くの反対に会い、時代の風も容易に吹いてくれません。人も集まらない、資金も集まらない、そうした極めて厳しい状況の中で、多くのプロジェクトがスタートしています。そのとき、『リーダーの資質として最も大切なものは何かと問われたとき、それは、そこに集ったメンバーたちに、魂が打ち震えるような“感動のひと時”を与えることができるかがリーダーの最も大切な条件ではないか』ということも、昭和を生きた高野さんをはじめとした多くの名リーダーたちは後輩に語り継ぎたかったのだと思います。

考えてみると、技術開発の世界において、市民生活が豊かになることを自分の夢、自分の喜びと思

えない技術者に、一体どのようなものが作れるのでしょうか。そして、人材を率いる会社のリーダー、経営者の心が枯れ果てたとき、その会社がいかなるものに落ちていくのでしょうか。ビジネスの社会においてもこの言葉の意味するものは、深いものだと思えます。そして何よりも、ものづくりというのは感動、感受性の世界です。感動や感受性のない技術者やものづくりの人々に、新たなものを作れるはずがないと私は思っています。

この「プロジェクトX」という番組はよく中高年の番組と言われましたが、現実には少々違っており、NHKを見ていた13歳から19歳の若者たちが一番見ていた番組であります。毎週火曜日の放送が終わると、私のところに膨大な数のメールが全国の若者たちから届きました。それは現在も続いています。その若者たちがそのメールで何と書いてきたのか。それは、この番組に登場するものづくりの人々の姿を見て、顔を見て、「顔がいい、かっこがいい」と書いてきたので

す。それは決して社会的な名声を得たからでもなく、富を築いたからでもない。しかし、何年何月何日に生産現場で自分の手でものをづくり、夜を徹して開発に明け暮れた、そうしたものづくりの連中を見て、「顔がいい、かっこがいい」というように書いてくれる若者たちが、この国にはまだたくさんいるのです。そのとき、今を生きるものづくりの人々は、自分ができるような顔をして、どのような背筋をして生きているのか、そのこともまた問われているのだと思います。

思いは叶う。努力する人間を運命は裏切らない。

そして、今日のテーマ「ものづくりへの挑戦」です。この十数年間、日本人は随分ひどいことを言われてきました。技術力が低い、国際競争力が20数番目だ、おまけに大胆さに欠ける臆病な民だとか、みんな嘘です。世界のどこを見て、津軽海峡の海の底240メートル



今井氏の講演に聴きいる参加者

にトンネルを掘ろう、黒部3000メートルの山々を越えてダムを造ろう、と考える民がいますか。世界のどこを見て、第二次大戦で廃墟となった国土を持った国で、英語一つだつて満足にできないのに、自分たちの製品を持って世界に飛び出して行った民がいますか。日本人しかいません。そして私は、この十数年、非常に厳しい時代がありました。この時代の中でも、多くのものづくりの人たちが自分の心の中の炎を燃やしながら戦い続けてきたことを知っています。日本人は自分たちの血脈、血の中に流れている勇氣と資質を信じて、もっと前を向いて頑張っていってほしいと私は思っています。

最後にこの番組に込めたメッセージを一言で言わせていただきました。

『思いは叶う。努力する人間を運命は裏切らない。逆境の中でも道は切り開ける。思いは叶う。』

今日はどうもありがとうございました。

(文責編集 金属労協組織総務局)



◆主催者挨拶◆ **労働運動を支える一つの仕組み** 加藤裕治／金属労協議長



この40年間、ご協力をいただいた明治学院大学と運営に携わっていただいた先生方の献身的なご尽力のお陰で、今日まで成功裏に続いてきたということに、まずは感謝申し上げたいと思います。

私は、労働組合の役割として運動を担っていくこともさることながら、労働組合でなければ味わえない、人間修練の場、教育の場を提供し、そこで育った方々が、社会や、あるいはまた企業に帰って日本の社会の質を支える役割があると思います。広く言えば民主主義というものを支える役割があると思います。

その中で、この労働リーダーシップコースは、まさにその全体を引っ張っていくリーダーを育てるということで、歴代の先生がたのご尽力で、今日まで大勢の先輩、あるいは今もご活躍のリーダーの皆さんを生み出してまいりました。今日も何名か卒業生の代表の皆さんがご出席になっていると思います。そのような点で、この労働リーダーシップコースは、日本の労働運動を支える一つの仕組みであり、一つの大きな存在感を持っており、社会的な意義もあると自負しています。

◆来賓挨拶◆ **“Do For Others”の理念に合致** 大塩 武／明治学院大学学長



本年は IMF-JC が労働リーダーシップコースを開設して、40周年を迎えられたとのこと、誠におめでとうございます。この40年間、この仕事に携わってこられた関係者の皆様に対して、心から敬意を表したいと思います。また、明治学院大学もこの労働リーダーシップコースの運営に、この間、多少なりとも貢献ができたとしたら、これはまた私たちにとってうれしい限りです。

なぜなら、IMF-JCの企画への協力というものは、私たちの大学の教育理念である“Do For Others”という、この言葉にふさわしい活動であるからにはほかなりません。“Do For Others”という教育理念は、私たちの大学の創設者であるヘボンに由来しております。

ヘボンは1859年にアメリカ長老教会から日本に派遣されてきました。ヘボンが44歳のときのことでした。以来、1892年に帰国するまで33年間、77歳まで日本に滞在して、日本人のために量り知れない貢献をしています。

労働リーダーシップコースへの明治学院大学の協力は、“Do For Others”という教育理念としている私たちにとって、当然果たすべき仕事であるし、またそれは大いなる名誉なことであります。

◆来賓挨拶◆ **重要な次代の労働リーダーの育成**

金子順一厚生労働省政策統括官



本日はこの東日本コースの40周年を記念してのシンポジウムということで大変おめでとうございます。この40年間という長い期間続けてこられましたのも、IMF-JCの皆さん、あるいは、今お話がございましたけれども、明治学院大学の諸先生がたのご努力の賜物だと思っております。心から敬意を表しますとともに、お祝いを申し上げたい。

日本の金属産業労働者が結集したIMF-JC、金属労協の労働運動に占めるウェイトが大きいのは、論を待たないわけでありまして、このIMF-JCの皆さんの労働運動が、日本の労働組合、もっと言えば、日本の国の経済の発展や社会の安定といったことにぜひ力強くご貢献をいただければと考えているところです。これから次代の労働運動の指導者を育成するという、このコースの意義も、そのような意味で、ますます重要になっていくのだろうと思っています。私どもも何か応援できることがあれば、側面からではありますが、応援をしてみたいと思っています。引き続きこのコースが、明治学院大学の諸先生がたの協力

も得ながら順調に発展をして、多くの優秀なリーダーのかたが誕生していくことを、心からお祈りを申し上げます。

◆運営委員長挨拶◆ **大学の社会貢献のパイオニア**

大平浩二明治学院大学教授



このリーダーシップコースが40年ということを考えますと、金井先生が40年前にこのコースをお作りになりまして、大学がいわゆる社会の外の皆様と協同するという、今で言いますと社会貢献ということがよく言われておりますが、当時の日本の大学としては非常に珍しいといましようか、ほとんど初めての企画ではなかったかと思えます。そして、それが40年続いてまいりまして、これは金井先生はじめ、その後の諸先生方、そしてIMF-JCの皆様の非常に強力なご支援、ご協力の賜物と考えています。

今現在、私どもは、ここにいらっしゃる神田教授、そして今日はたまたまヨーロッパの学会で出張しておりませんが、石井助教授という若い先生と三人で、この労働リーダーシップコースの運営を担当させていただいております。特に皆様ご存じのように、この10数年、日本の経済も非常に大きく変わってまいりまして、当然ですけども、こうした40年の歴史を踏まえながらも、またこの10数年の新しい経済や社会の動きに、できるだけ対応したコースにと改善してまいりました。そこで、数年前に、ややカリキュラムも改革をさせていただきながら、皆様と一緒に私ども運営委員も勉強させていただいているということです。

◆運営委員挨拶◆ **大局と現場感覚を備えたリーダーに**

神田良明治学院大学教授



私がこの労働リーダーシップコースにかかわらせていただいたのは、この明治学院大学に就職してからであります。そのときには金井先生もおられて、現場の方では、田村剛先生という方がおられて、手伝ってくれと言われてまして、田村先生のリーダーシップのもとでリーダーコースに携わるようになりました。

ここ10数年、労働リーダーシップコースにいろいろタッチさせていただいたのですけれども、かなり状況が変わってきていると思っています。基本的に労働リーダーシップコースでありますから、僕らがずっとその運営委員として考えてきているのは、「労働とは何か」、「組合とは何か」、「リーダーとは何か」という、この三つの大きな問いに対して答えられるような形で、カリキュラムを組むように心がけてきました。

組合リーダーというのは、基本的には大きな変化の中で、社会の変化の本質をどうやってつかむかというところに傾注して頭を使うというのが、ひとつ必要ではないかと思っています。しかし、これだけでは、多分組合員は動いてくれません。もう一つ、本当に組合員の皆さんの痛みが分かるという「現場感覚」だと思っております。これが果たして本当に分かっているのかというところがやはり問われる。この大局と、現場の部分のどうつなげるかというのが、多分リーダーに求められているのではないかと考えてならないのです。

そのときに、もう一つ重要なのは、いわゆる私を捨てて、大局をとらまえ、今言った、痛みをこたえるというような形で、1歩でも半歩でも動き出しうるかということが、われわれの考えるリーダーだと思っています。